

ファンタジー詩集

keituji

草原はまだ生きていた。

草原はまだ生きていた。

草の波を滑るヨット。

草原の中から

大きな気泡が浮かび上がってくる。

ぼくたちはその気泡から逃れるように

ジャイブを繰り返す。

稲妻が

うめき声を洩らしながら、

気泡を切り裂く。

草の波がひくひく喉を鳴らしている。

草原はもうすぐ死ぬ。

ぼくたちはジャイブを繰り返す。

子供の頃に無くしたはずの凧が

雲の上を飛んでいく。

シワシワの紙でできた平野の端まで
地図をたよりに歩いて行く。

幅の狭い水路があって
そのむこうに砂の山脈があった。

水路は浅く、
そこだけ子供のように真っ青だった。

詩:農夫2

農夫は午睡中。

ガラス張りの温室には

星座の地図が釘に引っ掛かったまま。

都市の顔

晴れ間の出てる空の
低い位置を通るE-Ghost。

地下都市に欠かすことのできない
逆さまの紙芝居をみているようで。

大胆すぎる軌道に沿って
どこまで落ちていくのだろう。

おさんぽのうた

肩寄せあって
おさんぽのうた。

抜け道の日だまり。
からだがほかほかしてくる。

雨に磨かれた白い木肌を
這い降りる 幼い蜘蛛。

明るい林床。
だが
鳥の気配はどこにもない。

目の奥に
紅葉の色だけが残った。

水の痕

濡れた町では
鳩は飛ばない。

水たまりを避けるように
歩く。

汚れた残雪に指を突っ込む子供たち。
赤紫色の湧き水。

最後に来る雪はいつも優しい、
すべりおちた魔法の文字。

秋のしるし

鉛筆削りと
手回しオルゴール。

竹籠に入った満月。

ライトアップされた
秋のしるし。

3月末日

犬と遊ぶ、引っ越しの日。

いくつもの出会いと分かれが絡み合い

やがて 桜色の糸玉のような

宇宙が出来上がる。

インクラの滝へ

緑を抱えた曲がり道
近づく別世界の生命
ぼくの自転車

カエルの卵塊を見つけ
笹の葉で指先を少し切った

光は針 点は子供
緑色の自転車

幻の滝まで あと少し

落ちている物を拾うな。

星を燃やして走る蒸気機関車。
耳をくすぐる旅の話。

虹色の毛糸球のような宇宙の中で
ぼくらは恋をし、歌い、踊る。

我に返ると
異星の客人はどこにもいなかった。

いまにもほどけそうな
虹色の毛糸球。

その中でぼくらは繰り返す。
恋をし、歌い、踊る。

新たな客人がやってくる。
そして。

観光地

運河沿いの市場にむかって
レモンを積んだりヤカーを引く
夢想家。

鼻にかかった配列の星達が
いい気になって
ティー・スプーンをまき散らし

(月の空虚さは
冷たい手で顔を撫でられるようなものだ・・・)

時が歪めた
橋のたもとで

観光客が
カメラを構えた。

水の跡

ブラジル音楽のように

雨は気持ちいい。

水たまりに靴を入れると

薄い桃色の花びらが付いた。

日曜日

日曜日の散歩

コーヒーの香りが石畳の上を漂う

日曜日の

虹をまとめて雨が降り出した

日曜日の

わたしは

少しでも空の明るい方へと

歩いていく。

星のミルクで

髪を濡らしながら

墮落女

月を捕ろうとして

彼女はハートのカードを落とした。

明かりの消えた窓が一斉に

星座を描いた。

海の紙片

白い壁に寄りかかったまま目を閉じて
魚群を思い浮かべる。

傾いた地軸を
アジサシがかすめ飛ぶ。

サンゴの腕に蝶がとまる。

満ち潮に合わせて
卵塊がいっせいに
海へ流れ出る。

すべてがねこになる。

すべてがねこになる、くもがねこになる、ゆきがねこになる。あめのかわりにねこが降り、この惑星の砂浜に無数の透き通ったねこがうめられている。風が吹くといっせいにニャヲ！と鳴く。

寂しくはない

雪の青い夜には

ネコのおくびも月までは届かない。

星間バスは十五分遅れている。たぶん新米の運転手だろう。

バス停で待つ間に

雪明かりで喉の奥まで真っ青。

幼いアリス

幼いアリスは

紫色のクレヨンで線を引く。

公園地図をつなぎ合わせて
新しい町をつくり出す。

それから

街路にビー玉をまき散らす。

夏昼頃

亀太郎の像は今日もつるんとしている。

上空では小型セスナ機が飛んでいる。

宅配業者の真っ白いトラックが道端にとまり

その側を水色の日傘をさしたおばあさんが考えごとしながらゆっくり通り過ぎていく。

弁当屋の前に並んでいた人達はいつの間にかいなくなった。